マイプライベートタイム

生まれ育った故郷を守ることの現実

伊豆市長（静岡県）　菊地　豊

平安時代とほぼ同じだった生家

音楽を聴くことは好きですが、専門知識がないので、ミュージカル観劇がちょうど良い。「オペラ座の怪人」は、東京、ニューヨーク、シュツットガルトで観ました。中学校3年の時に父を亡くし、母がキャディーで子供を育ててくれたので、中学生の頃からクラブは握っていますが、今でも100切りとの闘いです。48歳まで現役自衛官だったので、朝夕のランニング+筋トレは50代までやっていました。東京2020大会自転車競技が伊豆市の日本サイクルスポーツセンターで開催されることが決まった時、自転車にも乗るようになりました。しかし、これらはいずれも「たまに時間を費やす」程度の趣味です。現在、公務以外で必死に取り組んでいるのは草刈りとの闘い、すなわち相続した土地の管理です。

昭和33年6月、私は中狩野村（現伊豆市）の農家に生まれました。家紋が「丸に十」なので「うちは島津の流れだ」と自慢することもありますが、多分、「田んぼの田の変形」なのでしょう。小学校6年の時に改修した生家は藁屋根で、向かいの山から生活用水を引いていました。かすかな記憶に残る唯一の文明の利器は裸電球だけ。早朝に竈で母がご飯を炊く姿も覚えています。蛍光灯も、ガス炊飯器も、電話も、初めてわが家にやってきた日のことは全て鮮明に記憶に蘇ります。つまり、裸電球以外は、大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の頃と変わりませんでした。

実家の管理＝草刈りとの闘い

地元の高校を卒業して防衛大学校に入校し、ちょうど30年、48歳まで陸上自衛隊に奉じました。内閣府平和協力本部（モザンビークPKO）、外務省（在ドイツ日本国大使館）、内閣官房（内閣衛星情報センター）などやや異色の勤務を経て、49歳で伊豆市長に就任しました。4町合併によって発足した伊豆市の二代目市長です。

父が亡くなった50年前に農業用水を止めた自宅前には、私に試練の草刈りを命じる7枚の田んぼ、しかも全て段差になっています。どこからか飛来したナガミヒナゲシが繁殖し、毎朝、何百本と抜き取っていますがエンドレス。季節ごとに数回、草刈り機でその他の雑草も除去しています。耕作はしていなくても、中山間地特有の「ご近所さまの手前」、見苦しい管理はできません。

空き家となった隣家の奥には畑地が広がっています。いちばん奥の畑地は大昔には神社だったところで、高台のようになっています。わが家はお宮さんの手前にあるので「踊り場」が屋号になったとか。この地もひたすら草刈りの修行の場。隣家の裏林から木や竹も伸びてきて、不在の親戚に許可を得て通行の障害になっているものは伐採したり、地主の代わりに草刈りをしたり。皆さんと同様に私も週末、休日の公務が少なくありませんので、貴重な自由時間の多くをこのよう

7段になっている自宅前の農地の草刈り

な作業に割いています。市長を退任したら、農地として営農できるのか自信はありませんが、土地を最大限活用する方策は講じていきたいと考えています。なぜなら、最近恐ろしい「不都合な真実」に気づいたからです。

土地を使い、故郷を守るために

現在の日本の人口は1億2000万人、そのうち7200万人は三大都市圏と100万都市に住んでいます。今から75年前の1950年は人口が8300万人で、私たちの田舎にもたくさんの人が住んでいました。今から75年後の2100年には人口が5000万人になると予測されています。そうすると、希望する人たちは全員が100万都市に住むことができるようになり、伊豆半島は無人になってしまいます。そうしないためには、現にこの地に住んでいる私たちが、この土地をしっかり管理しながら、この地で生きていくしかありません。

私は大型自動二輪の免許を持っていますので、風を切りながらきれいな景色の中を走りたいとの欲求はあります。しかし、今は小型のスクーターで市内や山中を走ることばかり。林道を行けるところまで走るのですが、どこに行っても原木シイタケのホダ木が整然と並んでいます。この姿を見て得られる感動は、素晴らしいミュージカルを観劇したときと変わりません。伊豆市の山林は2万ha。杉檜の人工林が1万haで、自然林の広葉樹の多くがクヌギ（伊豆市の木）で、これが原木シイタケ生産の伝統を受け継ぐ土台になっています。新緑のクヌギ林のさわやかさは、ヴィヴァルディの「四季」を聴くことにも引けを取りません。

わが集落には狩野城という山城があります。「鎌倉殿の13人」では、片岡愛之助さん演じる北条宗時の横で、名乗ることなく討ち死にした狩野茂光が城主を務めた「八介」の一つです。後世、この家系から日本最大の絵師集団「狩野派」が生まれていきます。この山城を維持管理する「狩野城の会」というボランティア・グループがあり、私もその一員で、役割は「草刈り」。会の収入を得るために稲作もしているのですが、私にできる仕事がありません。そこで、比較的得意な草刈りになるのですが、安全のため集団から離れて一人で作業するようにしています。

真夏にはメタボ対策にも効果的な大量の汗を流し、季節ごとに4回も5回も農地の草を刈る現実。「俺は父祖から受け継いだ土地を守っているんだ」という爽快な自己満足だけが原動力です。

芸術的に並べられた原木シイタケのホダ木

絵師狩野派発祥の地、狩野城址公園

庭に遊びに来るのは「ハイジ」ではなくシカ